"seem", "appear", "look like" と「らしい」、「ようだ」*

村 山 康 雄

Comparison between the Japanese "rasii" and "yooda" with the English "seem", "appear" and "look like"

Yasuo Murayama

The Japanese words "rasii" and "yooda" are very often translated as "seem" and "appear" and these Japanese and English words seem roughly corresponding to each other in meaning.

These Japanese words have some syntactic and semantic features. Here we will compare these words with the English equivalents from the point of view of these features. "Look like", which seems similar to "seem" and "appear", is also considered.

In the course of the discussion, it will be shown that in both syntactic and semantic features, the Japanese words are more restrictive than their English counterparts. For example, "rasii" and "yooda" cannot take an interrogative or a negative form, while "seem", "appear" and "look like" can.

The difference of meaning among these English words is also discussed on a subjective／objective scale.

0. 序

英語の “seem”, “appear” は日本語で「らしい」、「ようだ」などと訳され、これらの英語、日本語の単語はお互い意味がほぼ対応すると考えられている。[1] 本稿では “seem”, “appear”が日本語の「らしい」、「ようだ」が持つ統語的、意味的な特徴を持つのかどうかを調べる。なお、“look like”もこれらの語に意味が近いと思われるのでこの語についても考える。また、“seem”, “appear”, “look like”間の統語的、意味的な相違についても言及する。

1.「らしい」、「ようだ」、“seem”, “appear”, “look like”の意味

1.1.「らしい」、「ようだ」の意味

これらはともに話し手の推量を表す助動詞で、以下の意味を持つ。

「らしい」　そう判断するに足りる何らかの外部の根拠がある推量を表す。

(1) 台風が近づいて電車が遅れているらしい

「ようだ」　「らしい」同様根拠に基づく推量を表すが、話し手の主観的要素が含まれる。

(2) この空模様では明日は雨になるようだ

1.2. “seem”, “appear”, “look like” の意味

“seem” (“it seems that ...”) ... のように思われる、... のようだ、らしい

(3) It seems that something is wrong.

“appear” (“It appears that ...”)　... らしい、... のようだ

(4) It appears that he is a rich man.

“look like” (“It looks like ...”)　... のように思われる

(5) It looks like it will snow soon.

2.「らしい」、「ようだ」、“seem”, “appear”, “look like” の統語的特徴

2.1. 疑問文になるか

2.1.1.「らしい」、「ようだ」は疑問文になるか

「らしい」、「ようだ」は疑問文にならない、あるいはなりにくい。

(6) *明日雨が降るらしいですか

(7) ?明日雨が降るようですか

疑問というのは通常話し手みずからが考えていることが正しいかどうかを尋ねるもので、わざわざ外部の根拠に基づくそのような情報があるかどうか聞くことは不自然である。このことは疑問詞を伴う文だとさらに明白になる。

(8) *誰が明日来るらしいですか

(9) *誰が明日来るようですか

2.1.1. “seem”, “appear”, “look like” は疑問文になるか

では、「らしい」、「ようだ」に相当すると思われる英語の語（句）は疑問文になるだろうか。

(10) Does it seem that it will rain tomorrow?
(11) Does it appear that it will rain tomorrow?
(12) Does it look like it will rain tomorrow?

英語のこれらの語（句）は疑問文になれるようである。

2.2. 否定文になるか

2.2.1.「らしい」、「ようだ」は否定文になるか

日本語のこれらの助動詞は否定文にならない。

(13) *明日雨が降るらしくない
(14) *明日雨が降るようにない

自分はそのようには考えていないというのは自然だが、話し手がわざわざ外部の根拠に基づいたそのような情報がないというのは不自然である。

2.2.2. “seem”, “appear”, “look like” は否定文になるか

(15) It does not seem that it will rain tomorrow.
(16) It does not appear that it will rain tomorrow.
(17) It does not look like it will rain tomorrow.

疑問文の場合同様英語のこれらの語（句）は、否定文になれるようである。

3.「らしい」、「ようだ」、“seem”, “appear”, “look like” の意味的特徴

3.1. 文の命題を疑えるか

3.1.1.「らしい」,「ようだ」が含まれる文の命題を疑えるか

話し手はこれらの助動詞を含む文を発した直後、みずからその文の命題に対して「らしい」の場合には疑問をもつことができる。

(18) 明日雨が降るらしいが、本当に降るのかな

では、「ようだ」ではどうだろうか。

(19) ?明日雨が降るようだが、本当に降るのかな

「ようだ」では話し手は命題を疑いにくいようである。これは「らしい」、「ようだ」ともに根拠に基づく推量を表すのだが、これら二つの助動詞を比較すると、「らしい」は客観的な度合いが高く、それに対して「ようだ」は主観的な度合いが高いからだと言えよう。

『日本語教育辞典』(1982)はこれらの助動詞の判断の根拠について「らしい」は客観的根拠に基づく判断を、他方「ようだ」は主観的根拠に基づく判断にも、客観的根拠に基づく判断にも用いられると述べている。

また、生田目(1979)は「ようだ」について、「「らしい」同様根拠のある推量を表すのに用いるが、この表現は客観の情勢をそのまま受け入れて自分の観察によるとそう見える」いう意味であると説明している。

また、早津(1988)は「直接的情報」／「間接的情報」、「ひきよせ」／「ひきはなし」という概念を用いて説明している。すなわち、「ようだ」は判断の根拠がみずからの視覚などの直接的情報であり、それに対して「らしい」の場合には間接的情報であり、また話し手が判断の対象となる事態

や、判断の内容に対して身近に感じている場合には「ようだ」を、距離を置きたい場合には「らしい」が用いられるとしている。「ようだ」、「らしい」の持つこれらの性質が「ようだ」が婉曲な断定に、「らしい」が伝聞にも用いられる原因だと説明している。

言い換えれば、「らしい」を用いる場合にはその命題には話し手はさほど関与していない。つまり話し手みずからの判断があまり加わっていないので、話し手はその命題を疑うことができる。他方、「ようだ」を用いた場合にはその命題には話し手がもっと関与している。つまり話し手みずからの判断が入っているので、そのみずからの判断が加わった命題を疑うのは少し無理があるようである。

この主張は例文(6)、(7)で見た「らしい」、「ようだ」の疑問文についても当てはまる。

(6) *明日雨が降るらしいですか

(7) ？明日雨が降るようですか

「ようだ」は主観的な度合いが高い。つまり話し手みずからの発想に近いので「らしい」に比べて疑問文になりやすいと言えよう。

3.1.2. “seem”. “appear”, “look like” が含まれる文の命題を疑えるか

これらの語（句）を含む文の命題を話し手は疑えるようである。

(20) It seems that it will rain tomorrow, but I wonder whether it really will.

(21) It appears that it will rain tomorrow, but I wonder ...

(22) It looks like it will rain tomorrow, but I wonder ...

しかし、これらの語（句）に “to me”が付くと、難しくなる。[3]

(23) ?It seems to me that it will rain tomorrow, but I wonder whether it really will.

(24) ?It appears to me that it will rain tomorrow, but I wonder ...

(25) ?It looks to me like it will rain tomorrow, but I wonder ...

3. 2. 文の命題を否定できるか

3.2.1.「らしい」、「ようだ」を含む文の命題を否定できるか

話し手はこれらの助動詞を含む文を発した後、どちらの場合もその命題をみずから否定できないようである。

(26) *明日雨が降るらしいが、降らないと思う。

(27) *あす雨が降るようだが、降らないと思う。

確かにこれらの助動詞は外部の根拠に基づいた推量であるが、その結論に至る過程で話し手の何らかの推論作用が入っているので、みずからその判断をした直後、みずからその判断を否定することはできない。

3.2.2. “seem”. “appear”, “look like” が含まれる文の命題を否定できるか

(28) It seems that it will rain tomorrow, but I do not think it will.

(29) ?It appears that it will rain tomorrow, but I do not think it will.

(30) ??It looks like it will rain tomorrow, but I do not think

it will.

上記の例が示すように、“seem” は可能であるが、“appear” はすこしおかしく、また “look like” は非常に難しいようである。

なお、“to me” が付くとどの要素の場合も否定できない。

(31) *It seems to me that it will rain tomorrow, but I do not think it will.

(32) *It appears to me that it will rain tomorrow, but I do not think it will.

(33) *It looks to me like it will rain tomorrow, but I do not think it will.

4. “seem”, “appear”, “look like” 間の統語的、意味的な相違と、「らしい」、「ようだ」

4.1. これまでは “seem”, “appear”, “look like” 間の相違については触れなかったが、ここで統語的、意味的な観点から考えてみたい。

4.1.1. “I”（一人称）が主語になれるか。

(34) I seem to be tired.

(35) ?I appear to be tired.

(36) *I look to be tired.

“seem” は可能であるが、“appear” はすこしおかしく、また “look like” は非常に難しいようである。これは何を意味しているのであろうか。

これらの語（句）の意味の違いに関して、『英文用例辞典〈語彙〉』

(1991)は以下のように述べている。

appearは外見上そう見えるという印象を表すが、実はそうではないかもしれないという含みがある. lookは最も直接的で、眼にそう見えること、そして実際にそうであることを言う. seemは主観的に筆者の心理的態度を述べるのに用いる.

また、『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版(1994)も同様の説明を行っている。

seem 主観的にみて真実性のありそうなものに用いる:It *seems* warmer today.今日はもっと暖かくなったようだ. ***appear*** 実際はそうでなくとも、少なくとも外見上そのような印象を与えることを示す：The house *appears* to be deserted.どうやらその家は空き家のようだ. ***look*** 実際も外見もそのように見えることを示す: She *looked* very much frightened. ひどくおびえた様子だった。

また、同辞典は “It seems that ...” の文に関して以下のように述べている。

It seems that John is sick.(ジョンは病気だそうだ) では話者は人伝えに聞いて判断したという含みがある。

この例文に対して、『小学館プログレッシブ英和中辞典』第2版(1987)ではさらに「... that 節の内容は真実であるかどうかはあいまい」としている。[4]

これらの説明から言えることは、判断の根拠という観点からは、“look (like)” が外見も実際もそのように見える、そうであるという意味で最も主観的であり、次に外見上はそのように見えるという “appear” が続き、最後に “seem” が来る。この語は話者の心的態度を表すが、確たる外部の根拠はなく、例えば “it seems that ...” では、判断の根拠としては最も客観的な伝聞も可能である。つまり、“look (like)”, “appear”, “seem” の順で話し手の判断に対する関与の度合いが低くなる。

(34)の例で “seem” が “I” (＝話者) を主語に取れるということは、この語は判断の根拠が一番客観的、つまり話し手の判断に対する関与が少ないので、話者自身のことであれ、まるで他人のことのように客観的に外部から見ることができるからだと考えられる。その次に主観度が低い “appear” が来る。一番主観度が大きい “look (like)” は見かけも、実際もそうであると話し手が判断するわけだから、他人のことはいざ知らず、話し手は自分はどうなのかを知らないはずはないのでこの語句は話し手自身には用いられない。

4.1.2. 文の命題を否定できるか

3.2.2. で “seem”. “appear”, “look like” が含まれる文の命題を話し手が否定できるかどうかを見た。“seem” は可能であるが、“appear” はすこしおかしく、“look like” は非常に難しいようであった。

(28) It seems that it will rain tomorrow, but I do not think it will.

(29) ?It appears that it will rain tomorrow, but I do not think it will.

(30) ??It looks like it will rain tomorrow, but I do not think it will.

これらの例もまた “look like”, “appear”, “seem” と順に主観度が低くなることを示している。“seem” は話し手の判断の関与が低いので、みずからの判断を否定しやすい。他方 “look like” はその判断に話し手の関与が高いため、その判断をみずから否定しにくい。

4.2. “seem”, “appear”, “look like” と「らしい」、「ようだ」

前節 4.1.で “look like” が主観度が一番高く、次に “appear” が来て、そして “seem” が一番主観度が低いことを見た。また、3.1.1.で「ようだ」と「らしい」では「ようだ」の方が主観度が高いことを見た。これを図に表すと以下のようになろう。[5]

seem　appear　look like

「らしい」　「ようだ」

低い ←――――――――→ 高い

主観度

“It seems that ...” の命題が人伝えによる判断も可能であるということは、同様に伝聞にも用いられる日本語の「らしい」と共通点があることになり、どちらかというと、“seem” が「らしい」に、“appear”, “look like” が「ようだ」に近いのかもしれない。

5. まとめ

本稿では日本語の「ようだ」、「らしい」とこれらの語に意味的に相当すると思われる英語の “seem”, “appear” および “look like” との比較を

統語的、意味的な観点から行った。

まず、統語的には日本語の「らしい」は疑問文になれない。「ようだ」も不自然である。しかし対応する英語の語（句）はなれた。否定文に関しても、日本語の助動詞はなれないが、英語の語（句）はなれた。

次に意味的な特徴として、日本語の「らしい」は命題を疑えるが「ようだ」は難しいようである。対応する英語の語（句）は全て可能である。命題を否定できるかについては日本語の助動詞はともにできない。英語の語（句）では "seem", "appear", "look like" とだんだん難しくなるようである。このことはこれらの英語の語（句）はこの順で主観度が高くなることを示している。これは "I" が主語になれるかどうかという統語的特徴からも説明される。日本語では「らしい」、「ようだ」の順で主観度が高くなる。

日本語の助動詞とこれらに対応すると思われる英語の語（句）を比較すると、英語の語（句）の方が、疑問文、否定文になるなど日本語の助動詞よりも統語的、意味的に制約が緩やかである。つまり英語は日本語ほど客観／主観の区別をしないということではないだろうか。

注：

*本稿は言語文化研究所の1994年度研究費の助成を受けて行われたものである。

1. これは "seem" が「らしい」に、"appear" が「ようだ」に、それぞれ厳密に一対一で対応するという意味ではなく、"seem", "appear" の両語のグループがおおよそ日本語の「らしい」、「ようだ」のグループに相当するということである。

2. ここではこれらの語（句）間の細かい意味の相違については触れない。

3. “seem”, “appear”, “look like” と似た語で蓋然性、可能性を表す “likely”, “probable”, “possible” には “to me” などが付かない。

4. It seems that Johon is sick. に対して、John seems (to be) sick. (ジョンは病気らしい) は話者が直接ジョンに会ってそう判断したという含みがあるとしている。

5. 注1でも述べたように、これらの英語と日本語の語 (句) の間に厳密な一対一の意味の対応関係があるというのではなく、相対的にはこのような対応関係にあるのではないかということである。

参考文献

Alfonso, Anthony. (1966) Japanese Language Patterns. Tokyo: Sophia University.

早津恵美子 (1988) 「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』第7巻　第4号

堀口俊一監修 (1991)『英文用例辞典〈語彙〉』 日本図書ライブ

柏岡珠子 (1980)「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』第17号

加藤泰彦他 (1989) 『テンス・アスペクト・ムード』荒竹出版

小西友七他編 (1987)『小学館プログレッシブ英和中辞典』第2版

小西友七他編 (1994)『小学館ランダムハウス英和大辞典』第2版

生田目弥寿 (1979)「推量を表す言い方」『国際学友会日本語学校紀要』第4号

日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育辞典』大修館書店

仁田義雄 (1992)「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』第77号

田野村忠温 (1990)「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』第10号　京都大学言語学研究会